無量寿経優婆提舎願生偈註　巻上

東京班　田中郁雄

観彼世界相勝過三界道

此れより已下は是れ第四の観察門なり。此の門に分けて二の別と為す。

一は器世間荘厳成就を観察す。

二は衆生世間荘厳成就を観察す。

此の句より已下「願生彼阿弥陀仏国」に至るまで、是れ器世間荘厳成就を観ずるなり。中にまた分けて十七の別と為す、文に至りて當に目くべし。

此の二句は即ち是第一の事なり、名て観察荘厳清浄功徳成就と為す。

此の清浄は是れ捻相なり。仏本と此の荘厳清浄功徳を起こしたもうゆえは、三界は是れ虚偽の相、是れ輪転の相、是れ无窮の相にして、蚏蠖（しゃくかく）循環するが如く、蚕繭（さんけん）の自ら縛わる如く、哀れなる哉な衆生此の三界顛倒の不浄に締わるるを見そなわして、衆生を不虚偽の処に置いて不輪転の処に於いて不无窮処において畢竟安楽の大清浄処を得しめんと欲しめす。

此の故に此の清浄荘厳功徳を起こしたもう也。

成就とは、言うこころは此の清浄は破壊すべからず汗染すべからず。

三界は是れ汗染の相なり是れ破壊の相の如くには非ざる也。

「観」は観察也。

「彼」は彼の安楽国也。

「世界相」は彼の安楽世界の清浄の相也、其の相別に下に在り。

「勝過三界道」、道とは通也。此の如くの因を以て此の如くの果を得む、此の如くの果を以て此の如くの因を酬う。因に通じて果に至る、果に通じて因に至る、果に通じて因に酬う、故に名づけて道となす。

三界は一には是れ欲界、所謂六欲天、四天下の人・畜生・餓鬼・地獄等是成。

二には是れ色界、所謂初禅・二禅・三禅・四禅の天等是れ也。

三は是れ無色界、所謂空処・識処・无所有処・非想非非想処の天等是也。

此の三界は蓋し是れ生死の凡夫流転の闇宅也。復苦楽小（すくなし）殊に修短暫く異と雖も統て而も之を観ずるに有漏に非ざることなし。倚伏（いぶく）し相乗して修環際无し。雑生觸受し四倒長く拘わる。且の因且の果虚偽相い襲う。

現代語訳

彼の世界（お浄土）の姿を私（天親）が観ずる（見る）に、この世の欲界、色界、无色界の三界に勝りすぐれている。

此れより已下は五念門の第四の観察門なり。此の門を分けて二となす。

一は器世間荘厳成就を観察す。器世間とは浄土の環境が成就しているのである。二は衆生世間荘厳成就を観察す。衆生世間とは浄土の仏、菩薩方の姿が成就しているのである。

此の句より「願生彼阿弥陀仏国」（8／13）に至るまでは器世間荘厳成就とする。この中を分けて十七句とする。

この二句は即ち第一の事で、名づけて「観察荘厳清浄功徳成就」とす。この清浄は是を代表しているのである。

仏が元この荘厳清浄功徳をを起こしたもう所以は、三界（欲界・色界・無色界）は、嘘、偽りの世界であり、生死をを繰り返す世界であり、終わりのない世界にして、尺取虫が茶碗のまわりをぐるぐる回るようであり、蚕が繭を出して自縛するようである。哀れな衆生よ、この三界顛倒して、不浄にまつわられていることを仏は見そなわして、衆生を嘘、偽りのない世界、生死を繰り返す世界、終わりのない世界をして、究極に安らかで、大清浄の世界を得させようと思われた。

此の故に、此の清浄で荘厳された苦悩のない功徳を起こされたのであります。

成就と言うのは、この清浄は壊すことができない、けがれに染まざれず、三界のように汚染の相であり、破壊の相の如くではない。

「観」は観察である。心に物事を思い浮かべて細かく明らかに考えること。「彼」は彼の安楽国、お浄土である。「世界相」はお浄土の清浄の相である。その想別に※下の文にある。

「勝過三界道」、道は一般的に、このような因をもって、このような果を得しむ。このような果をもって、このような因を酬う。故に名づけて道となす。果は因になろうとする、因は果になろうとする。

三界は、一には欲界所謂、六欲天（欲界に属する六重の天）、四天下の人（須弥山の四方にあるとされる四大陸にいる天人）、畜生、餓鬼、地獄等これなり。

二は色界、所謂、初禅（四禅定の第一、瞑想の第一）、二禅、三禅、四禅の天人等である。

三は无色界（精神的要素からなる世界）、所謂、空処（虚空のように無辺であると観ずる境地）、无所有処（何もないと観ずる境地）、非想非非想処（想いがあるのでもなく、無いのでもない境地）天等である。

この三界は推量するに、これは生死する凡夫流転の暗闇の家宅である。

苦楽に多少の異なりがあり、命に長い短いのわずかな差があるといえども、煩悩にあらざるものはない。禍の中に福あり、福の中に禍がひそんでいて、互いに重なり合って、循環際なし。四生（卵・胎・湿・化）の生を受けて、四顛倒に長く拘束される。かつは因、かつは果、嘘偽りが相襲う。

安楽は是れ菩薩の慈悲正観之由より生なり、如来の神力本願之処建（しょこん）なり。卵・胎・湿・の生茲れに縁って高楷（こうこつ、楷は揖（ゆう）の誤字・揖はお辞儀をすること・高は遠くの意、お辞儀をして遠くへ去ること）、業繫の長き維（つな）此れより永く断つ。

※①続括（ぞくかつ）之権、勧めを待たずして弓を引き、※②労謙善譲普賢に斉しくして徳を同じくす。三界に勝過して是れ近き言を抑（おさう）

感想

曇鸞大師が浄土を感ずるに、浄土は穢土の三界より超え勝れていて、浄土そのものが清浄である。そこの住んでいる仏、菩薩方も信心成就している。我々の三界は曇鸞大師の譬が見事に言い当てている。凡夫人の煩悩成就の者が浄土に往生すれば不断煩悩得涅槃と言われている。これは死んでからの話ではなく、この世の事であることを聖人がいわれている。私のいるところが、ここが浄土の南無阿弥陀仏であることをいわれている。

安楽は是菩薩の慈悲、正観（正しい智慧によって見ること）の故によって、生ずるなり。如来の不可思議のはたらきと本願が建てられたことによるのである。

卵・胎・湿の流転の生はこれによって遠くにさる。業繫の長き綱はこれによって永く断たれる。

※①下の文

「荘厳清浄功徳成就」とは「偈」に「観彼世界相・勝過三界道」と言えるが故に、此れいかんが不思議なる。凡夫人の煩悩成就せる有りて、亦彼の浄土に生ずることを得ば、三界の繫業畢竟じて牽かず。即ち是れ煩悩を断ぜずして涅槃分を得るなり。いずくんぞ思議すべきや。（12／120）

「能発一念喜愛心　不断煩悩得涅槃」について、覚如は（26／16）に凡夫不成の迷情に令諸衆生の仏智満入して不成の迷信を他力より成就して願入弥陀界の往生の正業成ずる時を「能発一念喜愛心」とも「不段煩悩得涅槃」とも「入正定聚之数」とも「住不退転」とも聖人釈しませせり。（講解教行信証・星野元豊師）

※②続括の権

「智度論」に出る譬え。空・無相・無願の三解脱門を修し得た菩薩は、諸法の寂滅を覚って声聞の阿羅漢の如く無余涅槃に入るべきなのに、何故そうしないのか、と言う問いに答えて、菩薩が三解脱門を修するのは。たとえば虚空に向かって矢を放つようなもので、放っておけば矢は大地（涅槃）に落ちるのであるが、菩薩は次から次へと虚空に矢を射って、ついに大地にかえらしむることがない。それは衆生教化の利他方便行のためである。と説く。括とは矢の末尾の弓の弦を受けるところ。続けざまに矢を放つことを続括と言う。権は権方便、菩薩の利他行を言う。

※③労謙善譲

労を謙虚におこなって、その結果を善く人に譲ること。

（解読浄土論註・東本願寺）

赤秀品枝

究竟して虚空の如く広大にして辺際無し

此の二句を荘厳量功徳と名付ける。
阿弥陀仏が法蔵菩薩の時、荘厳量功徳を起こされた理由は、三界（欲界、色界、無色界）を見られるに、狭い、、小堕（小さな穴）、陘（谷）陪（小高い丘）、陼（渚にある砂の丘）あるいは、建物は迫く、窮屈であり、大地、田んぼは狭苦しい、又どこかへ行こうとしても路は狭い、あるいは山や河が行く手をはばみ、さえぎり、あるいは国境があって行く事ができない。
だから、菩薩は荘厳量功徳の願いを興され、我が国（浄土）を虚空のように広大で辺際が無いように願われた。
虚空のごとしとはこの国（浄土）に来生するものはいかに多くとも一人もいないように感じるくらい広いことを願われた。
広大にして辺際なしとは虚空の如しをはっきり表したものです。
量功徳の成就とは、十方衆生の往生するもの（すでに往生した者、今往生するもの、これから往生するもの）は過去、現在、未来三世に渡って生まれてくる人がどれだけ多くても満ちることはない
だから、畢竟如虚空広大無辺際と言われている。
問　維摩居士などは小さな部屋に高さ八万四千由旬の獅子座を三万二千包み入れてなおあまりがある。どうして狭いけど広いのか。
浄土は国境がないということをあえて言わなくてはならないのか。
答え　場所の広さをたとえにしているのではない。空のようだと言っている。悟りの

究竟如虚空　広大無辺際

此の二句は荘厳量功徳成就と名づく
仏本（もと）此の荘厳量功徳を起こしたもう所以は、三界を見そなわすに、陜・小・堕・陘・陪・陼にして、或は宮観迫迮なり。或は土田逼隘なり。或は志求路促（つづまり或は山河隔ち障え、或は国界分部せり。此の如き等の種々の挙急の事有り。
是の故に菩薩此の荘厳量功徳の願を興したまえり。願わくは、我が国土虚空のごとく広大無際ならん、と。
「如虚空」とは、言うこころは、来生の者衆（おおし）と雖も猶無からんが若くならんとなり。
「広大無際」とは、上の如虚空の義を成ず。何が故ぞ虚空の如しという。広大にして際無きを以ての故に。
成就とは、言うこころは、十方衆生の往生せん者、若くは己（い）に生じ、若くは今に生じ、若くは当に生ぜん、無量無辺なりと雖も、畢竟じて常に虚空の如く、広大にして際無くして、終に満つる時無からん。
是の故に、「畢竟如虚空・広大無辺際」と言えり。（のたま）えり
問うて曰わく。維摩の如きは、方丈に苞容して余あり。　何ぞ必ず国界無貲（し）なるを、乃し広大と称すや。
答えて曰わく。言う所の広大は、必ずしも畦・畹を以て喩と為すに非ず。但、空の如しという。亦何ぞ方丈を累ねんや。
又、方丈の包容する所は、陜に在りて広なり。覈（まこと）に果報を論ずるに、豈広に在りて広なるが若きをや。

世界をいっている維摩の部屋がつつみいれるのは狭いところにあって広いのである。仏の世界は広くてひろいのだ。

考察

延塚先生は『浄土論註』の中で、
荘厳量功徳とは浄土の量は我々の分別を超えて虚空の如く広大である。つまり無量寿である。南無阿弥陀仏の働きは無量寿・無量光の働きである。清浄功徳は無量光を表し、どんなに人が生まれてきてもいっぱいにならない量功徳は無量寿をいっている。
曇鸞の場合は清浄功徳が総相です。親鸞聖人の場合
帰命無量寿如来　南無不可思議光といわれ、無量寿、無量光が総相です。
12-149 浄土論に曰く「世尊我一心に尽十方無碍光如来に帰命したてまつりて安楽国に生ぜんと願ず、彼の世界の相を観ずるに三界の道に勝過せり、究竟じて虚空の如く広大にして辺際なし」
この量功徳は清浄功徳と併せて浄土の総相として表してある。そして量功徳は無量寿である。
無量寿の命を生きさせてもらうのだと細川先生は仰っています。
人は死んだらどうなるのか。人は死んだらおしまいだと思っています。無量寿の命をたまわったらどうなるのか。無量寿の命が生まれたら、死ぬとか、生きるとかということは問題でなくなる。無限の彼方というものを考えるようになる。長い命を持つと視野が変わってくる。
聖教をすきこしらえたる人の子孫には仏法者出でくるものなり

私には長い先を考える力はありません。無量寿如来が私の命となって考える力を与えてくれる。私が生きておるとか死んでおるとか関係ない。どうか無限の彼方まで仏法が栄えてくれることを念ずるようになると
細川先生のお言葉です。
仏法がこの世で伝えられずんば来世来世でつたえられずんば来来世というお言葉が身近になってきました。
そして生きとし生きる者が命をいただいています。赤ん坊から、老人まで、男も女も病人も健康な人も世界中の人々ウクライナの人、ソビエトの人、イスラエルの人みんな命をいただき、その命を一つも無駄にしないように願われています。
私の日頃の生活を考え、この浄土論註は何を教えてくださり、どう生きていったらいいのか学ばせていただきます。

正道の大慈悲は、出世の善根より生ず
この二句は荘厳性功徳成就と名づく。
仏もと何が故ぞ、この荘厳を起こしたもう。

★ 仏は何故、この荘厳を起こされたのか？

ある国土を見そなわすに、
愛欲を以ての故に即ち欲界あり。
禅定を攀猷するを以ての故に即ち色・無色界あり。
この三界は皆これ有漏なり。邪道の所生なり。長く大夢に寝て悕出を知ることなし。
この故に大悲心を興したもう。
願わくは我成仏せんに、無上の正見道を以て、清浄の土を起こして、三界を出でんと

※攀猷・・・攀は下から上へよじ登ること。猷は厭に同じ。いみきらうこと。
『大乗義章』には「攀上猷下」とあって、凡夫外道が波羅蜜を修する態度は、常に上地を勝れたものとして喜び、下地を劣ったものとして厭うから有漏道をまぬがれることができないのだ、とある。

○仏がご覧になった衆生の生き様は、自分にとって都合よく生きてゆきたいという自己中心の煩悩にとらわれ、深い迷いの世界にある。たとえそこから出たいと仏道を志しても、向上すれば有頂天になり、他を批判して人を見下すなど、常に人と比べ、分別の心を超えることはできない。
この三界は皆有漏（煩悩・迷いの世界）であり、上を求め下を厭う人間の発想、聖道門は、仏道でなく邪道である。
人々は自分がこのような迷いの中にいることにすら気づかず、迷いの世界を出る道があろうなどとは知ることもできないのである。
であるから、この有り様を悲しんで浄土を興されたのである。

○仏は既に仏であるにもかかわらず、「願わくは我成仏せんに」と、苦悩の衆生を救わずには仏には成らないと、命がけの願いを立てられる。どのようにかといえば、この上ない正見の道によって清浄なる浄土を興し、人々をこの迷いの三界から出させたいというものである。

★ その浄土とは何か？どのような浄土か？（因、根、性、成り立ち、本質）
・・・性功徳の「性」からたずねる。

① 性とは是れ本の義なり。この浄土は、法性に従い、法の根本にそむかないものである。
この事は、『華厳経』の宝王如来性起品に説かれている如来性起の意義と同じである。

※『華厳経』の宝王如来性起品・・・（『講讃　浄土論註　第四巻』延塚知道　P12より）
「本の義」とは法のことですから、あらゆるものの本来性と考えることができます。阿弥陀如来の浄土はどんな者にとっても本来性であるということです。
（中略）そもそもこの『華厳経』という経題は雑華荘厳を意味します。立派な華も、雑草も、どんなものも法ということが本来性なのです。それを美しいと

佐藤　展

か雑草だとかを決めるのは人間の分別心です。だから、そのような分別を超えて、本来性が華開いていることを説くのが『華厳経』です。阿弥陀の浄土は生きとし生ける者の本来性（本の義）である、ということがまず初めに説かれているのです。

②　性とは行為を積み重ね、くりかえして性を成ずるということ。これは法蔵菩薩を指している。法蔵菩薩は諸々の波羅蜜を集め、それを積み重ねくりかえして、この浄土を成じたもうたのである。

○法蔵菩薩が衆生救済のために五劫の間思惟して、四十八願を選びとり、兆載永劫にわたる修行の結果この浄土を建立されたという、法蔵菩薩のご苦労を表していると思われる。

③　性とは聖種性のことである。はじめ法蔵菩薩は世自在王仏のみもとにあって、無生法忍を悟られたが、この時の位を聖種性と名づける。法蔵菩薩は、この性の位のうちにあって、四十八の大願を発し、この土を修起せられた。すなわちこれを安楽浄土というのである。この浄土は、彼の聖種性における発願によって得られたものである。得られた結果の中に、その因を説くから性と名づけるのである。

※聖種性・・・聖は初地以上の無漏の聖者。種は仏果に対する因位の意。性は不壊不改の意。即ち、この位に住して動ぜず堕落しないから性という。総じてこれは菩薩の十地の位を意味し、ここでは因位の法蔵菩薩を指す。

④　性とは「必然」の義であり、「不改」の義である。例えば海の性は一味であって、いろいろな流れが入ってきても必ず一味となり、海の味はそれらによって改わることがないようなものである。また人の身の性は不浄であるから、いろいろの素晴らしい色や香り、美味しいものでも、身体に入れば全て不浄となるようなものである。安楽浄土は諸々の往生する者に、不浄の身もなく、不浄の心もない。つまるところ全て清浄で平等な無為法身を得るのである。それは安楽浄土の清浄の性が成就されているからである。

「正道大慈悲出世善根生」とは、平等の大道なり。平等の道なればなり。名づけて正道と為る所以は、平等は是れ諸法の体相なり。諸法平等なるを以ての故に発心等し。発心等しきが故に道等し。道等しきが故に大慈悲等し。大慈悲は是れ仏道の正因なるが故に。

＊『解読　浄土論註』（東本願寺）P40の解読

「正道の大慈悲、出世の善根より生ず」とは平等の大道である。もとより平等の道であるからこういうのである。名づけて正道とするわけは、平等とは諸法の根本の相（すがた）であって、諸法が平等であるから、法蔵菩薩の発せられた願心は平等である。発せられた願心が平等であるから修行の道は平等である。道が平等であるから大慈悲は平等である。大慈悲こそは仏道の正因である。（だから平等の道を正道というのである）

○「正道大慈悲出世善根生」である浄土とは、平等の大道である。親鸞聖人の真筆本　他には「正道大道大慈悲出世善根生」と「大道」の文字を加えてある。（『講解　教行信証・真仏土の巻』星野元豊著　P1518より）

○法蔵菩薩が苦悩の衆生を救わずには私は仏に成らないと、命がけの誓願を立て、五劫の間思惟して、四十八願をたてられ、「五逆、十悪の自己に目覚めて

念仏申す」という生き方、道を興してくださった。浄土とは、頑張っていつか到達するような所ではなく、生きる方向、道を与えられること、どんなに頑張っても死ぬまでなくならない「自分に都合よく生きてゆきたい」「私は正しい」という自己中心の思い、人と比べ優越感劣等感に縛られる心をそのままに、どんなことに出会っても、どんな心が出て来ようとも、お念仏申して生かされる道。それは、すべての人に可能な生き方である。それは、人間の努力で進む道でなく、如来より回向された大道である。ということをいわれているのでは？

正道大慈悲というは、慈悲に三縁有り。
一には衆生縁、是れ小悲。
二には法縁、是れ中悲。
三には無縁、是れ大悲なり。
大悲は即ち出世の善なり。安楽浄土はこの大悲より生ずるが故に。
故にこの大悲を謂いて浄土の根と為せる。
故に「出世善根生」と曰う。

○無縁・・・切れば血の出る関係？

浄光明満足　如鏡日月輪

佐々木 玄吾

一　形相功徳

形相功徳＝形は自体の意。相は認識の対象たる相。浄土の万物は、それは自体光明を満足していることを明かすのが形相功徳である。

万物＝万物の霊長（人）物・人・草木・動物

この二句は荘厳形相功徳成就と名づける。

仏がもと、この荘厳功徳を起こしたもう所以は、日が四域をめぐるのをみると、一方が光をそそぐときは、他の三方に光がとどかない。また庭内にあって庭が大きな火をたいても、明かるく照らされるのは十仞にも満たない。

このようなわけだから、清らかな光明を満足しようとの願いを起こしたもうたのである。日や月の光が、それ自体において満足しているように、彼の安楽浄土は、広大で辺がないとはいえ、清浄の光明が充満していたらぬところとてない。だから「浄光明満足すること鏡と日月輪との如し」というのである。

四域＝須弥山を中心とする世界の中、外海に位する四大州のこと。日や月の光がとどく極限の地である。日や月は須弥山を中心として東より西に廻るから北州が夜中の場合は、東州は日没、南州は日中、西州は日の出前というように一方に日光があたるときは三方に光がとどかない。

〈感想〉 万物が光明を自体満足しているということについて、私は光明を自体満足できない「声聞」であると長い間思っている。「声聞は他の音声を聞いて行ずれども自ら智慧を生ずること能わず」（十住論）と言われる。

又、「声聞は実際を以って証と為す。討るに更に能く仏道の根芽を生ずべからず。而して仏本願不思議の神力を以って摂して彼に生ぜしめ必ず当にまた神力を以って其の無上道心を生ずべし。譬えば鴈鳥の水に入れば魚蝱咸く死す。群中に触るれば死せる者皆悉かえるが如し。此の如く生ずべからざるをして生ず。この故に奇とすべし。然るに五不思議の中仏法最も不可思議なり。仏能く声聞をして無上道心を生ぜしむ。まことに不可思議の至りなり」（大義門功徳の最後論註上）

実際＝涅槃の異名。阿羅漢の声聞は身を滅し智を滅した無余涅槃の境地をもってさとりとして、そこから一歩も動こうとしない。『智度論』巻二八には次のようにいわれている。「阿羅漢は大慈大悲無し。本誓願をもって一切衆生を度すること無し。また実際を以って証となす。已に生死を離るが故に」

又、光明ということで照育、照破、照護ということを教えられたことを思い出す。この教えがひびくことである。如来、善知識のご苦労を憶う。

備諸珍宝性　具足妙荘厳　－種々事功徳
種々事＝事はものがら。浄土の樹や池や
楼閣等のものがら。

この二句は荘厳種々事功徳成就と名づける。仏はもと、どうしてこの荘厳を起こしたもうたかといえば、ある国土を見シれるのに、泥や土で宮殿を飾り、木や石で華麗な楼閣をつくっている。あるいは金を彫り、玉をちりばめてあるが、思うように願いを満たすことができない。あるいは営々と努力して、あシやるものを完備しようとすれば、さまざまの辛苦を受けるのである。

このようなわけだから、大悲の心を興こしたもうて、私が仏となるには必ず珍しい宝物を充分にそなえ荘厳華麗にして、しかも自然に他のものに対する執着を忘れて、おのずかシ仏道を得しめたい、と願われたのである。

この荘厳のさまは、たとい毗首羯磨が細工に妙絶であるといっても彼がどれほど思案を積み想いをつくしても、それをまねることができないほどである。

性とはさきにのべたように根本という意味である。浄土の荘厳を生み出している根本の願いがすでに清浄である以上、それから生まれた荘厳が、どうして不浄でありえようか。だから経にいっている。その心が浄シかであれば仏土は浄シかである。と。だかシ諸の珍宝の性を備えて妙荘厳を具足せり」といわれているのである。

宮餝＝餝は飾と同じ。宮殿の飾りのこと
華觀＝華麗な宮觀（楼閣の意）
毗首羯磨＝種々の工作を為し建築を司る
インドの天神。妙匠・工巧・種々工業と訳す。
経＝「維摩詰所説経」のこと。この言葉は
巻上の仏国品に出る。（大正蔵十四・五三八〇）に出る。

〈感想〉 私はここで細川先生を団長とするシルクロードの旅を思い出した。敦煌の莫高窟は千年も彫り続けられて来たものである。正面の大仏殿の前でみんなで勤行した。細川先生は、「仏教がインドから伝わってきたというけれども、それは単に伝わったというものではなく、その途中で人々の心をうるおし郷土を護ろうとする人が居り、仏の像をきざむ人がおり、金を出す人がおり、作業する人達を養う人達がいて始めて可能な事である。その事を思う時、先人の苦労を偲んで感謝せずにはおれないものがある。」と。

シルクロードの旅　西安（唐の都長安）の香積寺（善導大師の遺骨を納めた寺）の十層の大塔・莫高窟等を見学して思うことは観察門で説かれている三厳二十九種の荘厳はシルクロードの遺跡の中に表現されているのではないかと思った。そして仏教徒の方々が善導大師の「往生礼讃」の中の「自信教人信　難中難　大悲伝普化　真成報仏恩」の御心で造営されたのであると思った。それがあって今私達の現在の喜びがあるのだと細川先生は言われる。

妙色功徳から雨功徳まで各荘厳功徳のポイントとキーワード

音石和男

（六）妙色功徳

○十二通りの比較をして、最もすぐれた金色の光として示される「安楽国中」の光明

第三願（悉皆金色の願）に誓われる「真金色」の意味（「宮城顗選集」十六巻 P243）

・いつまでも変わらない、磨けばもとの輝きがすぐ戻る。

・「中道実相の色」十二色・十四色の一つの色ということではなく、光そのもの。

○浄土の光明が煩悩の垢業とは無縁の清浄なものとして成就したのは「阿弥陀如来を増上縁と為たまうが故に」

「他力釈」の引文。利行満足章、五念門を修して自利利他成就する覚りについて。

「然るに、覈に其の本を求むれば、阿弥陀如来を増上縁と為るなり」（「聖典」十二P41）に対応。

増上縁＝仏が念仏の行者を摂取するについて三縁（親縁、近縁、増上縁）立てる中の一つ。『尊号真像銘文』には、「増上縁はすぐれたる強縁なり」（「聖典」十七Ｐ８）とある。

「（ａ）安楽浄土は是れ無性忍の菩薩の浄業の所起なり。（ｂ）阿弥陀如来法王の所領なり。（ｃ）阿弥陀如来を増上縁と為たまうが故に」（妙色功徳）は、「証の巻」で教行信証が如来の大悲回向の利益であると総括されたご自釈に相応。

「それ真宗の教行信証を案ずれば、如来の大悲回向の利益なり。（ｃ）かるが故に、もしは因もしは果、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまえるところにあらざることなし。（ａ）因浄なるが故に。（ｂ）果また浄なり。」

（「聖典」十二P122）（「宮城顗選集」十六巻 P259）

（七）触功徳

○「人天の六情、水乳に和して」（三事和合）

六根＝眼根・耳根・鼻根・舌根・身根・意根（人間の内に備わる感性能力）

六境＝色・声・香・味・触・法（根がはたらきかける対象）

六識＝眼識・耳識・鼻識・身識・意識（六根が六境にはたらきかけて起こす認識）

○軟宝に触れて実現する「身心柔軟」とは

現実をそのまま受け入れながら、現実に潰されず流されない在り方

・平野修師の解説（「平野修選集」第三巻 P270-271）

「菩薩が『広略に修行』して成就した『柔軟心』のことを『不二の心』と言われています。この『不二』とは、環境（現実）と我々とは無関係のものではなく。またべったり一つということでもない関係を表します。（中略）サンスクリットの mr̄ducitta という言葉が、「柔軟」と翻訳されたわけです。mr̄ducitta という言葉自身は、「熟達した」という意味がありますから、「柔軟心」とは「熟達した心」を意味しています。例えば、車に乗っている人の中で、本当に熟練した人は、車が故障してもどこがおかしいかわかります。しかし、ペーパードライバーは塾練していませんから、気がついてみたらガソリンがなくなっていたというようなことがあります。ですから、「熟練した心」とは、自分で自分を取り囲む環境（現実）の中で起こってきた問題の中で、『自らが主である』ことを失わないのが、柔軟心の意味かと思います。

ところが、我々においては、勝ったとか負けたとか、言う通りになったならなかったと言うの方が問題になりますから、事態がはっきりしなくなり、いよいよ亀裂を深めていくしかないわけです。ともかく我々は家庭の中にありますし。また、寺院にあって門徒の方との関係の中にあります。その中で、自分の思い通りにことを進めていくことが「柔軟心」ではないわけです。（中略）家にあっては家族の者を自由に動かしていきたいわけですが、なかなか思うようには動いてくれません。そうしますと、あれが消えてくれたら、これが消えてくれたらという願望が強くなってきます。そういう夢を見ますけれども、しかし、たまたま周りが消えてくれましても、最後に残ってくるのは、『みんなが・・・』という環境（現実）です。そういう意味では、私どもは『柔軟心』を成就していないわけです。

菩薩が成就した『柔軟心』は、『熟達した心』だと申しましたけれども、別の翻訳では『堪忍性』と言います。つまり、責任に耐えていく心です。我々には『柔軟心』の持ち合わせがありませんから、堪忍できません。堪忍できませんからぶち壊すわけです。力があれば事態をうまく動かしていけるのですけれども、力がないからぶち壊すのです。我々に仏法が明らかになると言うことは環境（現実）の中を生きていく上で、ぶち壊すのでもなく、押し潰されるのでもなく、その関係を『熟達して』生きていくということが起こるということです。

・何事も「よーこそ、よーこそ、なんまんだぶ・・」と受けとめた因幡の源佐

（八-1）三種功徳・水功徳

○開身悦体（「大経」調和冷暖　自然随意　開神悦体）

「自己自身が閉塞している、閉じている。『心塞がり』ということが言われていますが、閉塞している状態が私どもの在り方である。心理的にいえばコンプレックスである。コンプレックスがあって、何か固まっている。肩が張っていて窮屈である。それを開く、開放する用きが浄土の水になる。

何十億年昔は、命は水の中にあった。元々水の中に生じたに相違ない。水の中にあった命が何十億年かかって陸に上がってきた。魚が陸に上がってきた。人間の母胎の中では、はじめの頃は魚の形をしているのではないかというのです。そういうことで、水に触れることが何処かで体を柔らかにする。水に入ると浮力があるから力む必要がない。体が楽になる。それが私どもの本能にある。それを浄土の荘厳の用きに象徴している。

浄土の水に触れると心が開かれる。これは、本当は本願力に触れる所に開かれる心を水に触れるという形で象徴する。泳げない人間が水に入るとますます固くなるが、水の力を信じて身を投げ出せば浮かぶ。自分で頑張ろうとするとくたびれてしまう。水を信ずれば水の力が人間を浮かす。浮こうとする必要がない。ひとりでに浮いてしまう。

本願力にまかせれば、自然の本来にまかせれば、なにも自分で頑張る必要はないという心境、境地をいただく。それが心を開く。魂（神）がまず触れる。魂（神）というのは結局存在の本来を感覚するような能力である。それに触れると、身がくつろぐ、それが開神悦体ということである。」（本多弘之「大無量寿経講義・第

二巻」P506-507

(八―2)三種功徳・地功徳

○宮殿楼閣は鏡のごとく十方を納めん

・宮殿楼閣・・・「観経」定善十三観の中において、第六宝楼観は、それまでの宝樹（第四観）、宝池（第三観）がそこで初めて成就する「総観想」と位置付けられる。（「聖典」二P14）

楼閣はその大地の中心を生み出して統一を与え、十方を観ずることを可能にする。

（「宮城顗選集」十六巻P323）

・鏡納十方(三十一願＝諸仏世界を照見すること明鏡にその面像をみるが如し)

鈴木大拙「浄土系思想論」は、第三十一願に華厳の法界観をみる。

「極楽と娑婆と互いに相映出して、而も、娑婆は娑婆、極楽は極楽で、各々その分を守っているということは、華厳の法界観（一々事象がそれぞれ個物として存在していながら、いずれも理性によって融通無碍に相即している）である。（中略）

既に弥陀の仏土にこれら他方の世界が一・一映出せられるからには、これら他方の世界が亦一・一弥陀の浄土を映出せぬという道理はあるまい。『明鏡にその面像をみるが如し』という思想の裏には、華厳の法界観が潜んでいることを見なくてはならない。

浄土が浄土を映すということと、浄土が穢土を映すということは違うとも云われよう。これは一応表面の理屈で、浄土成立の本来の事由を考えてみると、浄土と穢土は単なる経文の記述の如何に拘らず、相映すべきものなのである。相映すというのは相対立するの意である。両者の矛盾を昂むれば昂むるほど、相互映出の法界観又は一如観が成立するのである」（岩波文庫版、P17-18）

○無所属亦非不属

恵然の「浄土論註顕深義記」は「無所属とは炳然（明らかなさま）として雑ら不るなり。非不属とは、円成一塊也」と釈す。

「種々の事がそれぞれに独立して互いに侵しあうことなく（＝無所属とは炳然

として雑ら不るなり)、しかも全体として渾然一体となって一つの調和ある世界(＝非不属とは、円成一塊也)を表しているということなのでしょう。その、一つの調和ある世界ということは、ただ単に、万事がほどよくバランスが取れているということではなく、その全体もそして同時にそのどの部分においても、一つの世界、願心荘厳の世界を表現しているということです。

(「宮城顕選集」十六巻 P333)

(八―3)三種功徳・虚空功徳

○懐道見徳

・恵然「浄土論註顕深義記」・・・浄土に巡らされた宝網にかかる鈴が響かせる法の音を聞く者には「塵労垢習、自然に起こらず」(「大経」虚空成就の文)の意とする。

・香月院深励「註論講苑」・・・「大経」下巻・三毒段末尾の「一世の勤苦は須臾の間なり。後に無量寿国に生れ快楽無極なり。長く道徳と合明し、永く生死の根本を抜き、復貪・恚・愚痴・苦悩の患無し」(「聖典」一 P57-58)を受けて、「今は浄土の菩薩の菩薩は眼に宝網をみ耳に法音をきくところで、その道徳を得給うといふて道徳の二字をわけて懐道見徳といふなり」と釈す。

道→信心・菩提心に備わる真実そのもの　　徳→信心に促されるこの世の生活。

(「宮城顕選集」十六巻 P347-349)

(九)雨功徳

○無量香普薫(第三十二願「宝香合成の願」)

供養の具としての香り・・・「法華経」法師品に説かれる十種供養

経巻・華・香・瓔珞・抹香・塗香・焼香・繒蓋・幢幡・衣服・伎楽

→四種が香

供具如意が実現　(最善の供養は聞法)

○華光出仏

・一一華中出三十六百千億光(仏)・・・浄土の蓮華の花びらから無数の光が放たれ、その光の中から仏が出現する

・如是諸仏　各々安立・無量衆生・於仏正道・・・阿弥陀如来の光の中から誕生した諸仏が、各々、無量の衆生を、仏の正道に安立せしむる。

・「讃阿弥陀仏和讃」

42　一のはなの中よりは　三十六百千億の
　光明照らしてほがらかに　いたらぬところはさらになし

43　一々のはなの中よりは　三十六百千億の
　仏身もひかりもひとしくて　相好金山のごとくなり

44　相好ごとに百千の　ひかりを十方にはなちてぞ
　つねに妙法ときひろめ　衆生を仏道にいらしむる

（以上）

名色功徳から雨功徳までの構成

2024.05.25　東京班　音石和男

「聖典」は島地聖典のページ

	浄土の相貌	浄土の受用				
荘厳功徳	（六）妙色功徳	（七）触功徳	（八）三種功徳			（九）雨功徳
			（八ー１）水功徳	（八ー２）地功徳	（八ー３）虚空功徳	
		身触	眼触			鼻触
願生偈の御文	無垢光炎熾　明浄曜世間	宝性功徳草　柔軟左右旋 触者生勝楽　過迦旋隣陀	宝華千万種　弥覆池流泉 微風動華葉　交錯光乱転	宮殿諸楼閣　観十方無碍 雑樹異光色　宝欄遍囲繞	無量宝交絡　羅網遍虚空 種々鈴発響　宣吐妙法音	雨華衣荘厳　無量香普薫
仏が此の荘厳を起こされた理由、 大悲の願を興された背景となった国土の在り方	**（不平等がもたらす苦悩）** ＜資質＞優れる劣るがあって平等でない ＜立場＞高い低いという差 ＜意見＞是非の対立 ＜果報＞三界に迷い苦しむ	**（夢や希望と現実のギャップがもたらす苦悩）** （眼は）金玉を宝として重んじても、（身は）衣服にはできない。（眼）磨いた鏡を珍しいと玩んでも、（身）敷具にはできない。目を悦ばせることができても、身には都合がよくない。眼に映るもの（夢や希望）と身のはたらき（現実）の矛盾。	**（不安や恐怖に閉じこめられる苦悩）** 川や海の水が大波をたて、濁り泡立って驚かし、流氷が迫って人々を閉じ込める。生きた心地もなく、逃げ出そうと恐怖の思いに駆られる。	**（山谷のような高低差により互いに孤立/理解しあえない苦悩）** 険しく聳える山々、嶺には枯木が横たわり、起伏の激しい山々が深い谷を刻んで連なり、雑草が覆う。大海原が見渡す限り続き、雑草が風になびく広沢には、誰も足を踏み入れない。	**（さまざまな憂慮・不安がもたらず苦悩）** 煤煙やちりが大空を覆い隠し、雷が稲光とともに大雨を降らせ、不吉な天火や虹がつねにやって来て、憂慮が重なり、身の毛もよだつ思いがする。	**（諸仏恭敬の願がかなわない身であることの苦悩）** 衣服を地にしき尊敬する人を招き、香り高い花や名宝によって恭いの心を表そうとするが、善業が乏しく果報が貧しいものには、成し遂げられない。
大悲の願によって成就する荘厳	無垢清浄の金色の光明が曜かす	浄土の柔軟な宝に触れ、三事和合して身心柔軟となり、法喜楽を生ずる。（現実をそのまま受け入れ、現実に流されない）	宝池水が宝花や微風とともに開身悦体をもたらす	宮殿楼閣は鏡のように十方世界を映し出し、無所属亦非不属。（互いに理解し合い、互いに独立した世界）	空を覆う宝の羅網が法音を説き、これを見て飽きることなく懐道見徳する。	常に供養の具を雨らせて、衆生を満足させる
対応する「大無量寿経」の御文（「論註」下巻の功徳成就との関係）			「論註」上巻・水功徳の開身悦体だけでなく、下巻の功徳成就には、「宝池荘厳」全体を引用 ・衆（14種）の妙法の声を聞く ・三途苦難の名あることなし （「聖典」ー P33-34）		「論註」上巻・虚空功徳の「宝網交絡・・」だけでなく、下巻の功徳成就には「虚空荘厳」全体を引用 ・浄土の風が吹いて、羅網にかかる鈴から法音を、宝樹から徳香を流布させ、それを受ける者は、「塵労垢習自然に起こらず」（「聖典」ーP37）	「論註」上巻・雨功徳の「宝衣を雨り宝華を雨る」だけでなく、下巻の功徳成就には三十二願（宝香合成の願）成就文と「華光出仏」全体を引用。 （「聖典」ーP37-38）
対応する大悲の願（四十八願）	第四願　無有好醜の願 （浄土に美醜・優劣の差なし） 第三願　悉皆金色の願 （浄土は皆金色に輝く）	第三十三願　触光柔軟の願 （浄土の光明を受け身心柔軟となる）	第四十六願　随意聞法の願 第十六願　　離譏嫌名の願	第三十一願　国土清浄の願 （諸仏世界を照見すること、明鏡にその面像をみるが如し）	第三十九願　受楽無染の願 （煩悩の染着がなくなる）	第二十四願　供具如意の願 第三十二願　宝香合成の願
親鸞聖人へのつながり	浄土を曜かす平等の金色は、阿弥陀如来の増上縁による（他力釈）	真仏弟子釈(「聖典」十二P87)	妙法の声＝南無阿弥陀仏		法音＝南無阿弥陀仏	讃阿弥陀仏和讃42,43,44 （「聖典」二ーP16）

備考		曇鸞大師は梵語も読めた？訳者（菩提流支）の翻訳を批判				取者＝文の表面だけで取らわれる人の「雨」誤解への注意喚起